

沙流郡平取町二風谷に現存する明治40年建築のアイヌ家屋について

鈴木明世

- 目次
- 1 はじめに
 - 2 貝澤家アイヌ家屋の現状について
 - (1) 調査概要
 - (2) 立地と沿革
 - (3) 創建時の状況
 - (4) 建物の現況について
 - (5) いくつかのポイント
 - 3 貝澤家アイヌ家屋の歴史的な位置づけ
 - (1) アイヌ家屋に関わる当時の状況
 - (2) 1940年代の二風谷におけるアイヌ家屋の外観的特徴
 - (3) 旧静内郡静内町における事例
 - (4) 貝澤家アイヌ家屋の歴史的な位置づけ
 - 4 まとめと今後の展望

Key Words

チセ (Cise)、アイヌ家屋 (Dwellings of Ainu)、民家 (Traditional house)、二風谷 (Nibutani)、様式変遷 (Transition of housing style)

1 はじめに

アイヌの家屋「チセ」と言うと、一般に北海道博物館や平取町立二風谷アイヌ文化博物館などで再現されているような、茅で葺いた建物を想起する人は多いだろう。また、茅ではなくササや樹皮が用いられるものも広く知られているところである。もちろん、現代においてこれら再現家屋は、伝統的な家屋の形態を示すものとして極めて重要で、後世に引き継がれるべき歴史資料である。しかし、「チセ」は家屋一般を示す単語であり、時代や形式に左右されるものではない。小林孝二は、今日におけるそのようなアイヌの建築文化のイメージを再検討することを目的に、鷹部屋福平をはじめとする既往のアイヌ家屋に関する研究成果や、絵画資料、発掘資料等をもとに、13～19世紀頃にかけてのアイヌ家屋の歴史的変遷を建築学的観点から描いている (小林 2010)。しかしその資料の性質上、近代以降、特に1800年代後半から1930年代頃までについては後年の課題として終えている。その後、その期間において撮影された写真資料や、1940年代の二風谷などの状況を記録した鷹部屋福平「毛民青屋集」を用い外観的な特徴を建築学的に類型化した

一連の研究 (佐久間・羽深 2011、2012、2014、2015) によって、空白期間の大きな枠組みが描かれている。しかし、簡易的な間取りはあれど、現物が残されていないため詳細な構造まで記された資料がほとんどない状況であった⁽¹⁾。

このような状況の中、沙流郡平取町二風谷に近代以降に建てられたとされるアイヌ家屋が現存しているとの情報提供を受けた。本稿は、その建物について、実測や観察等によって得られた知見を速報として報告するものである。

2 貝澤家アイヌ家屋の現状について

(1) 調査概要

本調査は、沙流郡平取町二風谷に居住の貝澤耕一氏の協力のもと行ったものであり、当該建物も氏の所有するものである。また、アイヌ建築文化の知見協力として、小林孝二氏 (NPO法人歴史的な地域資産研究機構) に調査への同行を依頼した。調査内容は次の通りである。

調査日程： 2020年11月2日 (月)

調査内容： 建物沿革についての聞き取り、建物の

鈴木明世：北海道博物館 研究部 博物館研究グループ

(1) 1930～40 (昭和10) 年代に建てられた数少ないアイヌ家屋の事例として、(中尾ほか 2003) がある。これについては後述する。



図2 貝澤家アイヌ家屋の現況



図1 敷地内における家屋の移動

国土地理院「基盤地図情報」に聞き取りの情報を付記し作成。拡幅前の道路は、国土地理院「1974～1978年の空中写真」をもとに記載。

観察、実測、写真撮影等

以降、当該建物は「貝澤家アイヌ家屋」と称する。

(2) 立地と沿革

貝澤家アイヌ家屋(図1)は、二風谷南部、沙流川と山地に挟まれた国道237号沿い東側に立地している。同敷地内東部に所有者の母屋及び山地があり、南面には耕作地が広がる。

沿革については、貝澤耕一氏への聞き取り及び父・貝澤正による記録(貝澤 1983)を合わせて記す。

貝澤家アイヌ家屋は、1907(明治40)年に、貝澤耕一氏の曾祖父・貝澤ウエサナシによって和人の家屋を真似て建てられ、住居として用いられていた⁽²⁾。当初は二風谷市街地の平取町立二風谷小学校南部近辺に立地していた⁽³⁾。住居として用いなくなった後、貝澤正の頃、1951(昭和26)年に現在の敷地内に移築された⁽⁴⁾。その移築の手段は、おそらく曳家であり、移築時に茅葺き屋根の保護のためトタンで覆っている。移築当初は国道237号に沿って東面向きに建てられていたが、1970年代以降、二風谷ダム建設と同時期に行われた国道拡幅工事の影響で現在地に曳家された⁽⁵⁾(図2)。現敷地内への移築時から現在地に移動するまでの間に、農耕用の馬小屋→搾乳用の牛小屋→倉庫と転用し、移動した現在も倉庫として利用し続けている⁽⁶⁾。

(3) 創建時の状況

貝澤家アイヌ家屋の当初状況については、(貝澤 1983)に以下のとおり記してある。

この家は、一九〇七年(明治四十年)代祖父ウエサナシが日本家屋をまねた建物で、本屋は萱葺で十五坪、下屋は桎葺きで八坪、中央に大きな炉があり板敷の床、間仕切りは板戸、押入、床間、畳敷の八畳間だけは天井もあり当時の文化住宅で、屋根に煙出しがあり屋根裏は黒光りに光っていて、和アイヌ折衷家屋であった。

この記述を見ると、貝澤家アイヌ家屋は「和アイヌ折衷家屋」であったとされており、これは和人とアイヌの家屋の形式が混ざり合ったものであることを意味していると考えられる⁽⁷⁾。つまり、貝澤家アイヌ家屋は、和人の建築文化⁽⁸⁾を主体的に取り入れて建てられたものであり、その中に伝統的なアイヌ家屋の要素も取り入れていた、ということになる。

(4) 建物の現況について

① 建物の規模と形式

この建物は、南面向き、間口5間(1間=6尺≒1820

(2) (貝澤 1983) による。

(3) 貝澤耕一氏への聞き取りより。

(4) (貝澤 1983) による。貝澤耕一氏への聞き取りでは、父・正が満洲へ入植する1941年頃(貝澤 2010)までにはあったのではないかと伝えられているようであった。なお、1940年の二風谷を悉皆的に記録した鷹部屋福平「毛民青屋集」では確認できない。

(5) 国土地理院の提供する1974～1978年の空中写真には、移動前の状況が示されている。

(6) 貝澤耕一氏への聞き取りより。(貝澤 1983)では、単に「我が家の近くに移したのが一九五一年(昭和二十六年)で倉庫として使っていた。」とだけ記述されている。この文面では移築当初から倉庫として用いたかは不明なため、聞き取りによる情報を優先した。

(7) 折衷とは、「あれこれと取捨して適当なところをとること」(広辞苑 第六版)を意味する。つまり、和アイヌ折衷家屋との表記は、和人の建築文化とアイヌの建築文化が適当なところを選択し混ぜ合わせた家屋であることを意味すると考えられる。

(8) 本州以南や北海道で発達した家屋の形式を和人の建築文化と考えると、木組みを用いた木造軸組や板間や座敷などの床張り、外壁に用いる板壁などがあり、これらは伝統的なアイヌ家屋には見られない建築構法である。特に北海道では、板葺きである桎葺き屋根も発達し、昭和初期においては北海道内で広く普及していた。

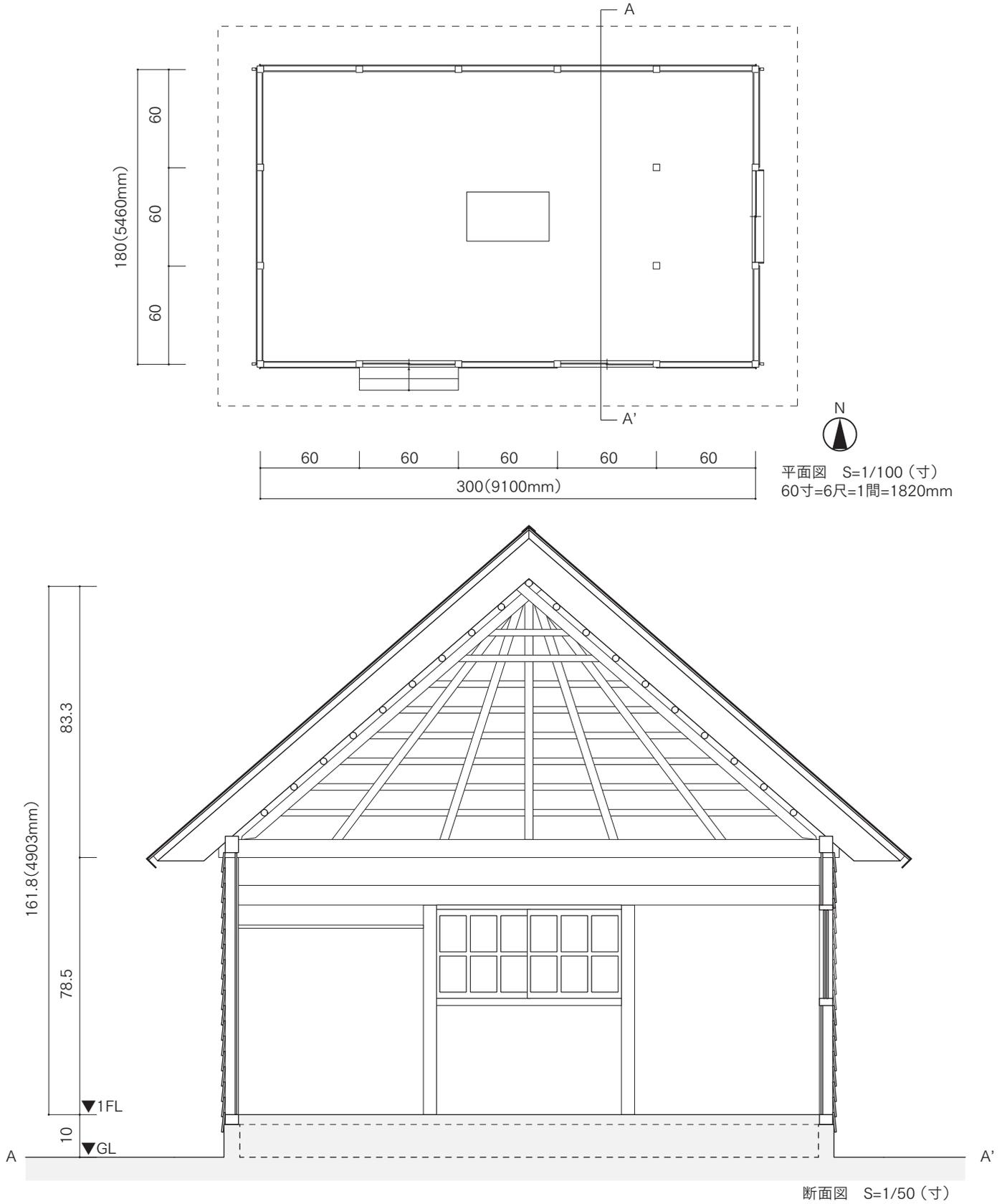


図3 貝澤家アイヌ家屋平面図 (上) / 断面図 (下) 実測資料をもとに作成

mm)、奥行3間の木造平屋建て平入である。前述の創建時の状況における本屋の坪数と合致するが、現況では下屋は確認できなかった⁽⁹⁾。屋根は寄棟造の茅葺(本葺)であり、現在はその上にトタンの菱葺⁽¹⁰⁾がなされている。外壁は下見板張で、1間幅の引き違い窓が南面と東面に配されている。また、棟の中央部には煙だし用の煙突が突き出している。

間取りは、中央に現在地への移築以降に掘削されたくぼみ⁽¹¹⁾があり、そのほかは2本柱が立っているのみで、間仕切り壁等は存在しない(図3)。その柱に対して内法寸法54寸(≒1636mm)の高さで幅4寸×せい6寸(≒182mm)の梁が架けられている。その下端に建具の溝があるが、対応する敷居は存在せず古材再利用の可能性も考えられる。また、柱材にも再利用材と思われるほぞ穴があり、これらが創建当初からあったものか、後年付け足されたものかは不明である。しかし、これらの柱や梁は明らかに意図して設置されているものであるため、この軸線を境に間取りを区別していたことは確かであろう。内壁は真壁⁽¹²⁾となるようにベニヤ板が貼られている。現況の内壁は貝澤正が取り付けただのものである。

② 構造

コンクリート基礎に乗せた土台が建物周囲にまわっている。柱、梁、桁は折置組⁽¹³⁾で組まれ、柱と梁は方杖⁽¹⁴⁾で補強されている。部材の寸法は、柱は4寸角(≒121mm)、梁は幅5寸(≒151mm)×せい5.5寸(≒166mm)、桁は4寸×せい5寸である。屋根は梁の上に叉首⁽¹⁵⁾が組まれており、小屋組の各材は縄で固定されている(図4)。ここには、ケトウンニ(三角叉首)と呼ばれる伝統的なアイヌ家屋に象徴される構造は用いられていない⁽¹⁶⁾。

(4) いくつかのポイント

① 建物の方位について

創建当初の方位は不明であるが、アイヌの伝統的な家屋のように、方位が考慮された種々の文化的な設えがあった可能性もある。その後、現敷地内に移築した際に

は、国道237号に平行で耕作地の方に入り口が向くように配置されている。これは、むしろ移築後の用途を鑑みたものと考えられる。また、現在地に移動する際も、倉庫の利用を考慮して設置されたものと考えて良いだろう。

② 本葺の茅葺屋根と外壁の下見板張について

前節で述べた現況を見るに、ほとんど和人の建築技術による建物であると考えられる。特に外観の特徴で影響が見られる点に屋根と外壁がある。この建物の現在の茅葺は、貝澤耕一氏によると本葺であり、その構造を含め伝統的なアイヌの家屋に多く見られる段葺ではない。しかし、佐久間らの成果を参照すれば、1940年の二風谷において茅葺の多くは段葺であるので、この建物も創建当初は段葺であった可能性も考えられる(佐久間・羽深2014)⁽¹⁷⁾。茅葺の更新周期⁽¹⁸⁾を考えると、一度以上葺替えを行っていることが想像できるが、移築直後に茅葺の保護のためトタンで覆っているため、1907～1951年まで同じ屋根であった可能性もある。なお、建設当時、北海道においては葺葺屋根が主流であり、下屋を葺葺にしていたことを考えると、アイヌの伝統的な家屋に合わせ、あえて茅葺を選択したと捉えることもできる⁽¹⁹⁾。つまり、「和アイヌ折衷家屋」において、アイヌの建築文化の要素のひとつとして、茅葺屋根を取り入れたと考えられる⁽²⁰⁾。

また、外壁について近代以前の伝統的なアイヌの家屋においては「板材がまったく使用されず、板床、柵板、板戸の類は設けない」(遠藤1993)ことが指摘されている。しかし、和人の建築技術を用いた貝澤家アイヌ家屋においては、創建当初より使用されていた。歴史的に見てアイヌ家屋に板壁が用いられた初期のものであると考えられる。

③ 軸組及び基礎の構造について

前項の外観の特徴に加え、貝澤家アイヌ家屋における木造軸組も、和人の建築様式を用いたものである。中でも、その小屋組に折置組が用いられている点が気になる点である。本州以南の住宅建築における様式編年に

(9) 下屋位置の推測は後述する。

(10) ひしぶき。正方形材を菱形の向きで貼り重ねていく葺き方。

(11) 現在地に移築後、倉庫以外の活用を考えた際に、炉のような火を扱うための場所として設けたようである。

(12) しんかべ。柱を露出させるように仕上げた壁のこと。

(13) おりおきぐみ。柱の上に小屋梁を架け、その上に桁を架け渡す小屋組の一種。

(14) 柱などの垂直材と梁などの水平材を固めるためにそれらの隅に斜めに取り付けられる部材。

(15) さす。屋根をつくる構造の一種で、2本1組の斜め材を等間隔に配置し、屋根空間をつくり棟木を支えるもの。

(16) ケトウンニのない事例も(鷹部屋1943)によって報告されているため、一概に和人の建築技術によるものであるとは言えないことに注意されたい。

(17) ただし、本葺の事例も確認されているため、可能性の提示に留めておく。

(18) 一般に、本州以南において、本葺の場合2～30年程度とされている。

(19) 開拓の村に移築復原されている旧菊田家農家住宅は、2階建てではあるが、茅葺屋根で1階下屋には葺葺が用いられている。そのため、この形式が特筆して珍しいものではないが、意図を持ってこの屋根形式を選択したものであると考察した。

(20) 屋根材については、地域性もあるため可能性の一つとして考えたい。しかし、(貝澤1983)において「和アイヌ折衷家屋」と言われていることから、こうした意図も考えられる。



図4 叉首構造の様子



図5 折置組（左）と京呂組（右）の比較
折置組は貝澤家アイヌ家屋、京呂組は旧納内屯田兵屋（北海道開拓の村）

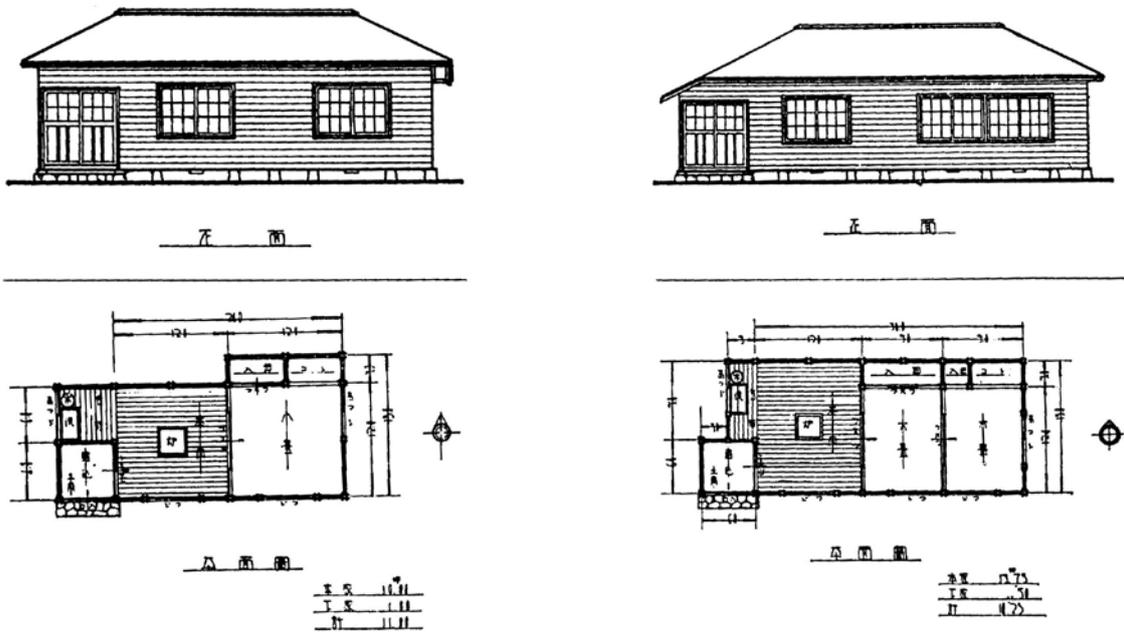


図6 北海道旧土人保護法ニ依ル住宅改良標準設計図第一図（左）／同第二図（右） 出典；河野本道1981

において、梁と柱が同じ位置に来ざるを得ない折置組より、梁の位置を柱に関係なく配置し自由な間取りを計画できる京呂組⁽²¹⁾の方が、構造としては新しいものとして扱われている（宮澤 1989）⁽²²⁾。特に、近代以降になると京呂組の割合が増えていき、現在の住宅ではほとんどが京呂組である。例えば、明治20年代に建設された納内屯田兵屋⁽²³⁾でも京呂組が用いられている（図5）。ただし、この年代は折置組も京呂組も用いられる過渡期であり、また施工する大工が持つ技術にも依存するので、一概に違和感を持つべきものであるとは言えないが、あえて折

置組を選択したという可能性も捨てないでおきたい。いずれにせよ、和人の建築技術を持った大工による施工である。携わった大工については不明であるが、もし判明すれば北海道における建築技術の流入・発展過程を考える事例にもなり得る。

また、現状の基礎はコンクリート基礎となっているが、これは現在地への移築時に設けられたものであり、当初は礎石の上に土台が乗せられていたと考えられる。

(21) きょうろぐみ。折置組に対する小屋組として扱われる。柱の上に先に桁を架け渡し、その上に小屋梁を架ける構造のことである。

(22) 折置組の利点として、屋根荷重を梁で受け直接柱に受け流すことができるので、構造を強固に保てるのが挙げられるが、その分大工手間は大きくなってしまふ。

(23) 現在、北海道開拓の村に移築復原されている。

3 貝澤家アイヌ家屋の歴史的位置づけ

(1) アイヌ家屋に関わる当時の状況

以上が今回調査した貝澤家アイヌ家屋の概要である。この建物の歴史的な位置づけを考える上で、貝澤家アイヌ家屋の頃のアイヌ家屋一般の状況について簡潔に記す。

1899（明治32）年に北海道旧土人保護法が制定され、同化政策が進行していく事になる。以降改正が繰り返されているが、その後の家屋に大きく影響を与えることになったのは1937（昭和12）年の改正である。そこでは、アイヌの家屋を改良することを目的に、家屋の建設に際して補助金を支給する制度が定められた。その規範として提案されたものが「住宅改良標準設計図」であり、当時の北海道における和人の家屋と同様の形式、つまり「土座を廃して床座を基本とし、茶の間（板間）と畳の間の区分による内部区間の分化、ガラス窓の設置、下見板張りの外壁、葺葺屋根など」（小林 2010）であった（図6）。結果として、この制度以降伝統的なアイヌ家屋の消失が急速に進行していくことになる。

しかし、北海道庁による調査では、それ以前の和人の技術を用いたアイヌ家屋について述べられている。例えば、『旧土人に関する調査』では、

（伝統的なアイヌ家屋の特徴とその現状を述べた後）
 而して、和人と接触の結果、近時次第に進化して、和人風の家屋或いは和人風に土人風を交へたる家屋を作るもの多く、純土人風の家屋は、浦河、河西、室蘭各支庁の如き旧土人の居住多き所に於ては尚其の数多きも、其の他の地方に在りては和人風若しくは和人風に土人風を交へたるものより其の数尠し。之等の状況を区及び各支庁別に記すれば大要左の如し。（中略）

浦河支庁管内 全戸数千四百八十七戸中土人風の家千百七十四戸にして七割八分に当れり。平取二風谷等の部落に於ては和人風の家屋多数なり。

と述べられている。また、『北海道旧土人概況』においても、相当数が板壁になっている。しかし、葺葺屋根の割合は未だ多くなく、板壁に比べ変化が遅かった様子が伺える（表1）。萱野（1975、1980）では、1935（昭和10）年前後の萱野自身の家屋や二風谷の家屋の状況について簡潔に記しているが、アイヌ家屋の約6割⁽²⁴⁾

表1 1936（昭和11）年頃のアイヌ家屋の類型
 『旧土人に関する調査』をもとに作成。主に、日高支庁の抽出と表形式の整理を行った。

支庁市名		日高				
種別		現状のままをもつて足るもの	一部修理を要するもの	増改築を要するもの	除去の上新築を要するもの	
総戸数		573	267	226	450	
住宅態様の状況	地上からの高さ（床）	1尺5寸以上	-	44	12	8
		1尺5寸未満	-	203	204	369
		全然なきもの	-	20	10	73
	屋根の種別	草葺	-	168	157	379
		葺葺	-	99	68	71
		垂鉛葺	-	-	1	-
	壁	泥塗壁	-	8	7	28
		板張	-	235	188	203
		草張	-	24	31	219
窓	1個	-	30	27	86	
	2個	-	106	92	247	
	3個	-	59	66	98	
	4個	-	41	33	18	
	5個	-	31	8	1	
天井	有	-	69	35	18	
	無	-	198	191	432	
通風採光の良否	良	-	124	67	52	
	否	-	143	159	398	

が茅葺の段葺で、さらに萱野自身の家屋は板壁であったことを述べている⁽²⁵⁾。

以上より、和人との接触が進行していく中で、住宅の様式が折衷されていき、住宅改良を目指した旧土人保護法の改正によって、明確な模範が示されたのである。なお、この当時、鷹部屋の調査では、逆に和人の家屋にアイヌの段葺の屋根を流用した事例もあり、「アイヌ屋根を模倣して建てるのが、其頃の和人にとっては便利でもあり、又簡易でもあつたであろう」（鷹部屋 1943）と指摘している。

(2) 1940年代の二風谷におけるアイヌ家屋の外観的特徴

鷹部屋福平「毛民青屋集」を用いた1940年の二風谷の状況について、佐久間らは家屋を外観の特徴から大き

(24) 「昭和一〇年前後の二風谷村は戸数約五五戸で、アイヌ家屋特有の茅の段葺き屋根の家は三五戸もあり、外観ばかりでなく、生活の中にも随所にアイヌの古い習慣が残っていました。」（萱野 1975）。

(25) 「壁代わりの板囲いも、三分板（厚さ一センチの板）を一重に外側から打ちつけてあるだけ。しかもその板は反り返り、おとなの握りこぶしが楽々通るぐらいの隙間が空いていました。ですから冬が近づくと、母と姉が大量に糊をつかって、新聞紙などを板壁の内側に貼り、隙間風や雪の入ってくるのを防ごうと努めたものです。」（萱野 1975）このことから、当時のアイヌ家屋における板壁が、壁として機能していなかった可能性が考えられる。

く4つの形態に分類している(佐久間・羽深 2014)。それは、「茅葺茅葺屋根の寄棟建築物(類型 A)」、「柵壁茅葺屋根の寄棟建築物(類型 B)」、「茅葺屋根の切妻建築(類型 C)」、「柵葺屋根又はトタン屋根の建築物(類型 D)」であり、この分類において、類型Aがいわゆる伝統的なアイヌ家屋の様相を示したものである⁽²⁶⁾。しかし、アイヌの家屋と判明しているうち60%以上が類型Bに属するものであった。類型Cは、アイヌ家屋を描いた絵画資料等にも見られる切妻の家屋であるが、全体の6%ほどしか存在しないようである。類型Dは、前節にて示した「住宅改良標準設計図」と同様の建物を示している。1940年の二風谷において、最も典型的な形態は

類型Bの「柵壁茅葺屋根の寄棟建築物」であり、4分類の中で言えば、貝澤家アイヌ家屋もこの類型Bにあたる。その中には、貝澤家アイヌ家屋と全く同規模の家屋も存在する。

また、家屋の平面形態についても類型しており、(貝澤 1983)における主屋と下屋の坪数(主屋・15坪、下屋・8坪)の関係を考えると、建物の妻側と平側へ1間分突き出して接続する(図7)の類型iiiのような形式で、いずれかの側を1間分減らせば、坪数の整合性が取れる(図8)。

なお、家屋の向きは全体の傾向として、建物の長手を南北軸に置き、道路に面する形で入り口が配置される傾向があり(佐久間・羽深 2014)、それに則れば、貝澤家アイヌ家屋の創建当初の向きもその2パターンに絞って考えてもよいかもしれない。

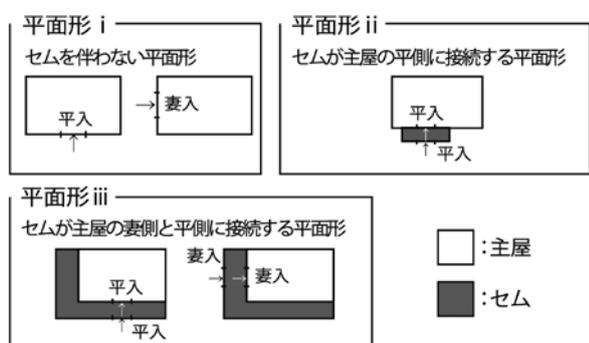


図7 1940年の二風谷のアイヌ家屋の平面類型
出典：佐久間・羽深 2014

(3) 旧静内郡静内町における事例

昭和初期に建設されたアイヌの家屋が旧静内郡静内町(現：日高郡新ひだか町)に存在した。それは、千葉大学玉井研究室らによって調査・報告されており、本稿における類例として大まかな特徴をまとめる(中尾ほか 2003)。当該家屋は、1935~45(昭和10)年代に建てられたものであり、増改築されつつもアイヌ家屋として住まわれ続けていた。

建物の形式は、南面向きに間口5間×奥行2間であり、北西側3間分に奥行き1間の下屋がついている。屋根は茅葺の段葺(ケトゥンニは存在しない)で、外壁は下見板張となっている。間取りは「住宅改良標準設計図」と類似しているが、屋根の段葺や、東面に存在する神窓など、アイヌの伝統的な文化が見られる点もある。玉井らの調査では、補助金制度を受けず、縁者の協力及び自費



図8 貝澤家アイヌ家屋の下屋の位置の推測
(佐久間・羽深 2014)における平面類型(図7)の平面形iiiと同様に下屋が配置されるとすると、8坪の下屋はこのようなパターンが考えられる。



図9 アイヌ家屋と和人の建築技術の混ざり合いダイアグラム

実際にこの順番で変化している訳ではなく、家屋の形態に注目し、伝統的な家屋と改良住宅の間をつなぐ様式変遷として、混ざり合いの段階をこのように踏んでいると捉えることができる。

(26) ここで述べられている柵壁とは、本稿における板壁と同様であるが、引用文献の表記を優先した。

による建設であったとしている。しかし、和人由来の建築技術は用いられているので、その中でアイヌ家屋の伝統的な設えを取り入れたのだと思われる。貝澤正の言葉を用いればまさに「和アイヌ折衷家屋」と言える。なお、前章で指摘した木組みについては、京呂組である。

(4) 貝澤家アイヌ家屋の歴史的位置づけ

以上、社会的な状況と、類例をまとめてきた。アイヌの家屋において、和人の建築文化との同化が進行したのは、1937（昭和12）年の北海道旧土人保護法改正が大きな契機になっている。しかし、それ以前から和人の建築文化の影響を色濃く受けた家屋も多く、アイヌと和人の建築文化が混ざり合う中で、貝澤家アイヌ家屋も建てられたのである。

ここで、貝澤家アイヌ家屋や旧静内町での事例を考えると、軸組は和人の技術によるものであり、伝統的なアイヌ家屋に見られる外観的特徴は茅葺屋根にある⁽²⁷⁾。屋根の主構造は和人の技術である又首構造であるが、特に旧静内町の事例では段葺きで葺かれており、伝統的なアイヌ家屋に寄せられている。貝澤家アイヌ家屋は、現在は本葺きであるが、以前は段葺きであった可能性もある。すなわち、貝澤正が述べる「和アイヌ折衷家屋」を考察すると、屋根から下部を和人の建築文化を用い、茅葺によってアイヌ家屋の要素を残した形式のことを言うのではないかと考えられる⁽²⁸⁾。後年には桁葺きの家屋が増えていくことになるため、このような建築文化交流による家屋形態が移行する過程を示す現物資料として、貝澤家アイヌ家屋を位置付けることができる（図9）。

また、アイヌの伝統的な家屋の規模は、「ふつう三間と四間、あるいは二間と三間の一間作りが基本の形」（萱野 1978）であり、貝澤家アイヌ家屋よりも小さい。1940年の二風谷においては、貝澤家アイヌ家屋と同規模の家屋も存在しており、和人の建築文化の流入と家屋の規模についても関係性を考える必要がある。また、こうした変化の中で、旧静内町の事例のようにいかにアイヌ文化の設えが残されているかも今後の課題である。

4 まとめと今後の展望

本稿では、貝澤家アイヌ家屋の沿革、形態をまとめ、同時代の社会的な状況と合わせ、その歴史的位置づけを行った。

その特徴としては、間口5間、奥行3間の木造平屋建て平入、寄棟造の茅葺（本葺）、下見板張の外壁などである。軸組や屋根構造、外壁などは和人の建築文化の影響によるものである⁽²⁹⁾。しかし、茅葺の外観によってアイヌ家屋の特徴を持たせたのではないかと考えられる。特に、1907（明治40）年創建という時代を考えても、アイヌと和人の建築文化交流について語り得る価値の高い現物資料となっている。この事例をもとに、空白期間であった近代以降のアイヌ家屋の変遷過程についてより詳細な調査を行うことが可能である。また、旧静内町の事例も参照しつつ、和人の建築技術が導入される中で、いかにアイヌ家屋の文化的側面を保持していたのか、今後の課題として併せて検証すべきである。

最後に、快く調査を受けていただいた所有者である貝澤耕一氏と、アイヌ建築文化の知見提供者である小林孝二氏及び、助言を頂いた諸氏に対し、ここに記して謝辞とする。

引用・参考文献一覧

- 北海道庁内務部 1918. 旧土人に関する調査. (小川正人・山田伸一編 1998. アイヌ民族 近代の記録. 草風館. より参照)
- 北海道庁学務部社会課 1936. 北海道旧土人概況.
- 鷹部屋福平 1943. アイヌの住居. 東洋建築選書 二. 彰國社.
- 萱野茂 1975. おれの二風谷. すずさわ書店.
- 萱野茂 1978. アイヌの民具. すずさわ書店.
- 萱野茂 1980. アイヌの碑. 朝日新聞社.
- 河野本道 1981. 対アイヌ政策法規類集. 北海道出版企画センター.
- 貝澤正 1983. 歴史をたずねて(第十七回) 祖父の建てた家. 先駆者の集い 33. 社団法人北海道ウタリ協会.
- 宮澤智士 1989. 日本列島民家史. 住まい学大系 022. 住まいの図書館出版局.
- 遠藤明久 1993. アイヌ住居の構造に影響を与えた松前藩の施策. 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東). pp. 1379-1380.
- 中尾七重・中島千鶴・玉井哲雄 2003. 北海道静内町のアイヌチセ調査報告. 日本建築学会大会学術講演梗概集(東海). pp. 85-86.
- 小林孝二 2010. アイヌの建築文化再考—近世絵画と発掘跡からみたチセの原像—. 北海道出版企画センター.
- 貝澤正 2010. アイヌ わが人生. 岩波書店.
- 佐久間学・羽深久夫 2011. 1860年代から1950年代の写真資料におけるアイヌ民族の住居の外観的特徴. 札幌市立大学研究論文集 5(1): 3-17.
- 佐久間学・羽深久夫 2012. 1940年の二風谷アイヌ集落を記録した鷹部屋福平の「毛民青屋集5・6」の資料整理. 札幌市立大学研究論文集 6(1): 81-95.

(27) 屋根組は又首構造を用いており、和人の構造であることに注意したい。旧静内町の事例では段葺きにしていることで外観的に伝統的なアイヌ家屋を模している。

(28) あくまで貝澤家アイヌ家屋の現況をもとに考察した結果である。創建当初には、旧静内町の事例のように神窓などのアイヌ文化特有の形式があった可能性もあり、それをもって和アイヌ折衷家屋としていたとも考えられる。

(29) 北海道開拓の村には、同時期の木造軸組下見板張りの建造物が多くある。また、又首構造の寄棟茅葺の事例としては旧菊田家農家住宅がある。

佐久間学・羽深久夫 2012. 鷹部屋福平「毛民青屋集5・6」に基づいた1940年の二風谷村アイヌ集落の建築物ごとの平面と外観的特徴. 札幌市立大学研究論文集 6(1): 97-112.
佐久間学・羽深久夫 2014. 鷹部屋福平「毛民青屋集」に基づいた1940年の二風谷村アイヌ集落に見られた建築物の実態. 日

本建築学会計画系論文集 79(706): 2733-2741.
佐久間学・羽深久夫 2015. 鷹部屋福平「毛民青屋集」に基づいた1940年の白老村アイヌ集落に見られた建築物の実態. 日本建築学会計画系論文集 80(707): 167-175.

RESEARCH REPORT

An Ainu House Constructed in 1907 That Stands Today in Nibutani, Biratori Town, Saru District

SUZUKI Akiyo

This study utilizes methods including measurement survey and bibliographic survey to report on the historical position of an Ainu residence which was built in 1907 (Meiji year 40), and stands today in Nibutani, Biratori Town, Saru District. This building differs from traditional Ainu residences, and primarily utilizes Japanese architectural techniques developed in Honshu and further south. Its configuration is a 9100 mm × 5460 mm timber-structured, single-

story house with a hipped, thatched roof and wood-paneled exterior walls. The building is a valuable historical structure which demonstrates that exchange of architectural techniques occurred between Ainu and migrants to Hokkaido from Honshu and further south. We find that this building can be placed in a continuum of transition from Ainu traditional residences to Japanese-style residences based on Japanese architecture.